

九州大学総合研究 博物館ニュース

March 2006 No.6

総合研究博物館の過渡的施設整備

九州大学総合研究博物館 館長 村江 達士

1. 九州大学総合研究博物館の活動指針について

九州大学総合研究博物館（以後、九大博物館と略称）では、九州大学理事、杉岡前九州大学総長、福岡市博物館長など学外関係者、全学の各部局から選出された運営委員会委員、名誉教授を主体とした協力研究員、並びに専任教員の間で、平成17年度に2度の意見交換を行いました。その結果、下記の活動指針を策定しました。この指針は、今年1月31日の朝日新聞に九州大学が出した全面広告「新しいアジアと知の拠点」の冒頭に梶山総長が述べられた「市民の方が知的生活を楽しんでいただけるようにします。そのために、例えば、図書館を24時間開館します。博物館も作り、課外授業で訪れた小中学生を九大生が案内します」という約束を実現し、かつ箱島朝日新聞社顧問の「あくまでも大学の主体性を失わないように」という要望をかなえるものです。

九州大学総合研究博物館の活動指針

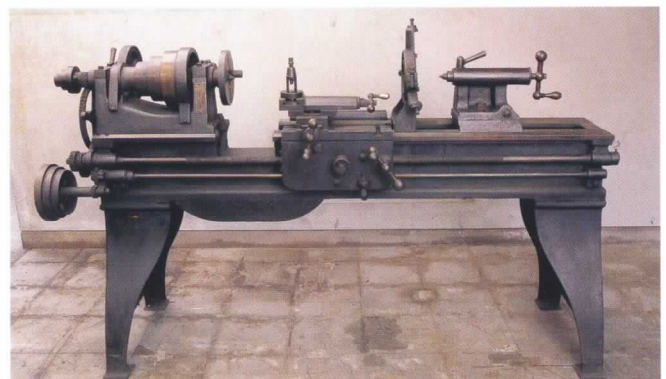
- ①今後の大学博物館は、大学の研究成果の歴史を示す場所として、ものの持つ情報とそれを使った研究成果を伝えるべきであり、そこでは研究者個人の顔が見え、研究に人間的な親しみを持たせる展示を行うべきである。
- ②九大博物館は、九州大学の歴史・学風を示すと同時に、過去に行ってきた社会貢献を世間に示す場となるべきである。
- ③全年齢層を対象とした生涯学習の材料として、それらの研究成果を広く学外に紹介し、大学を市民に親しみ易いものにする役目を担うべきである。
- ④それらの研究成果を学生・生徒への教材として提供する場合には、学校教育の担当者との連携を深め、授業の一環として成立させるべきである。
- ⑤情報提供の方法論そのものも博物館における研究対象とすべきである。

2. 当面のキャンパス事情において活動指針を 実行するために

上記の活動指針を実行するには、九大博物館が独自の常設展示場を持つことが必須の条件となります。新キャンパスへの移転が完了した時点では、新しい九大博物館が建設されており、そこでは、上記の指針に沿った活動がフルに行われることとなりますが、それまでには10年以上の歳月が必要となります。そこで、とりあえず工学系部局が移転した跡の建物を利用して、仮設の常設展示場と標本・資料の保存収蔵施設を設け、本格的施設の完成へ向けての下準備をすることを計画しております。以下、その検討状況をお伝えいたしますので、是非ご理解とご協力を頂きたいと思っております。

3. 仮設展示施設の整備

当面の展示施設として、具体的には、工学部2号館工場（知能機械実験室）跡を候補として考えております。ここが候補として挙げられる理由は、次のとおりです。①建物全体が既に無人状態になっている、②建物の半分はスレート葺の工場で、当面の利用希望部局が無い、③工場建屋は空間が大きくて展示の発想に自由度が大きい、④地下鉄箱崎九大前駅に近いので、学外への一般公開施設としては地の利を得ている、⑤コンクリートの建屋の2階部分に多量



1912年にアメリカから購入された施設

